

ディープなアジア映画鑑賞 ①

—シンガポール映画を初めて見る—

為我井 輝忠

去る5月12日から20日まで東京六本木で「Sintok 2012シンガポール映画祭」が開催されました。これまでシンガポール映画を見たことはほとんど無きに等しい状態だったので、ぜひ見たいと考え前売り券を購入しておきました。映画祭は今回で2回目。1回目は2年前にあったそうです。今回の映画祭を通して幾分かシンガポールの今を知ることが出来そうです。かなり多くの人でにぎわい、特に若い人々が多いのには驚きました。

上映作品は15本あり、その中から2本を選び、見るのを楽しみにしていました。本当はもっと見たかったのですが、これ位が限度でした。ともあれ1本はシンガポールで一番人気があるというロイストン・タン監督の「12Lotus」、もう1本は新進気鋭のブー・ジュンフォン監督の「Sandcastle」です。どちらも中国系監督の作品なので、シンガポールに住む中国系の人々の考えや生活を知ることが出来るのではないかと考え、選んでみました。また、タン監督はすでに日本でも「881 歌え! パパイア」(2007年)の公開で、かなり知られてた監督であり、シンガポールの今を代表する映画監督です。

「12Lotus」は、歌台(ゲータイ)のスターを夢見た少女の物語。父に仕込まれ、苦難と悲しい運命に耐え、福建歌謡の名曲12曲「12蓮花」の歌詞になぞらえ、非情な男に翻弄される女の人生を描いたミュージカル・メロドラマです。今回の映画の舞台となったのは「歌台」というもので、かつてのシンガポールではどこにでも見られたものです。しかし、今はあまりないようです。旧正月や旧盆の時に街角に野外舞台が建ち、京劇が掛かるのを見たことがある人もいると思いますが、歌台は京劇でなく歌を専門にした舞台です。もっぱら中国南方、(特に福建地方)の民謡や歌謡を行い、絶大な人気を誇っていましたが、時代と共に今ではもう少なくなっていました。そんな古き良き時



映画祭のポスター



「12Lotus」のロイストン・タン監督と主演女優の劉玲玲さん

代のシンガポールを垣間見ることが出来ました。

「Sandcastle」は、祖父母との交流を機に亡き父の過去、そして、シンガポールの消された歴史を知り、大人への道を歩みだす18歳の青年の物語です。映画の背景には、シンガポールがマレーシアから独立した後大きな政治的な動乱と共産主義を排除した時代を描き、映画からそうした時代の背景を知ることが出来たと言ってもよいでしょう。

今回、2本の映画を見ることが出来、この国を知る上で大きな収穫でした。それとともにロイストン・タン監督と「12Lotus」の主演女優・劉玲玲さんに直接お会い

できたことも言葉では言い表すことが出来ないほどの驚きでした。映画上映の後、2人の挨拶とオープニングパーティがあり、話をしたり、彼らの歌をきいたり、またシンガポール料理を堪能したりと、有意義な一夜を過ごすことが出来たことは大きな収穫でした。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。